商品の物神的性格とその秘密

佐藤塾テキスト・『資本論』第1章　第4節

「『資本論』を読む」浜林正夫

物神的性格：ものがみ。独立の生命を与えられ、神に祭り上げあれた物である。成田不動産のお守りは紙、布、木片からできている物であるが、人間は単なる物以上のもの、スーパーマンのような超能力をもつと考える。交通事故から免れる。お守りは物神である。物神は、魔力をもっていて、現世的なご利益を与える。

商品世界では、もともと人間の労働生産物である商品や貨幣が、逆に人間を支配する力として現れる。マルクスはこの関係を、人間の頭脳の産物である「神」や「仏」が人間を支配する力として現れる宗教的世界と対比して「物神崇拝」「物神的性格」と呼んだ。

「『資本論』探究　全三部を歴史的に読む」不破哲三

商品経済の社会では、人間と人間の関係が、社会の表面では、すべて物（商品）と物（商品）との関係として現れます。だから、人間による人間の搾取という根本問題も労働力の売買、言い換えれば〝労働力商品〟と〝賃金〟との交換、つまり物と物との関係として現れます。社会の根本問題が、物と物との関係の背後に隠れてしまうのです。

奴隷制社会や封建制社会など以前の社会形態では目に見える形で現れていた搾取するものとされる者の社会関係が、霧の中に姿を消してしまうのです。マルクスは、この逆立ち現象を宗教的世界との対比で捉えた〝物神崇拝〟という言葉を選んだ。

以下、第4節の「商品の物神的性格とその秘密」の論述にそって読解する。

商品は、一見したところ、自明で平凡なもののように見える。しかし、商品は感覚的なものであるのと同時に、超感覚的・神秘的な性格をもっている。

（商品の神秘的性格）

木材でテーブルがつくられる。‥テーブルは相変わらず木材である。だが、テーブルが商品として登場すると、それは感性的でありながら超感性的な物に転化する。（p.129）

「相変わらず木材」：テーブルは木材でつくられるが、形は変わるが、木材

そのものである。目で見ればわかる。すなわち感性的なものである。

「床に立つ」：足で立っているのはテーブル本来の姿である。すなわち使用

価値そのものである。

「ひとりでに踊りだす」：テーブルは、自分で使っている間（使用価値とし

ては）おとなしく座っているが、商品になったとたん、他の物と交換されるよ

うになる。すなわち使用価値ではなく、交換価値になる、という意味である。

お金と交換され、世の中を回っていく。市場に出さないといくらで売れるか

わからない。自分の感性ではわからない。すなわち超感性的である。

商品の神秘的性格は、商品の使用価値から生じない。それはまた、価値交換の内容から生じない。（p.129）

使用価値から生じない：人間の何らかの欲望を満足させる性質から生まれる

わけではない。具体的有用的労働は少しも神秘的なものはない。使用価値は感

性で確かめられる。触る、なめる、たたく。

価値交換の内容から生じない：商品の生産のために一定の人間的労働が必要

ということから生まれてくるわけではない。商品をつくる価値の大きさが決ま

るのも、支出された労働の量、あるいは時間であり、わかりやすい。そこには

神秘性はない。価値はひねくり回してもわからない。他の物と交換してみなけ

ればわからない相手である。

（商品の謎的性格）

では、労働生産物が商品形態をとるやいなや生じる労働生産物の謎的性格は、どこから来るのか？この形態そのものからである。（p.130）

商品という形をとったこと自体からきている。

人間的労働の同等性は、労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間的労働力の支出の策定は、労働生産物の価値の大きさという形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働のあの社会的規定がその発言する彼らの諸関係は、労働生産物の社会的関係という形態を受け取る。（p.130）

形態を受け取り：交換されるということ。

　　　　　価値対象性：対象性（相手）。

労働の生産物は、労働の生産物だという性質＝価値対象性をもっている。

人間労働の同等性は、商品の価値の同等性として現われ

生産物に投下された人間の労働量は商品の持っている価値として現われ

形態を受けとる：交換される。社会的関係の中で、あいだに貨幣が入るが、

交換される形をとるということ。

生産における人間と人間との社会的関係は、商品と商品の関係として現れて

くる。つまり、搾取という人間関係が、労働力商品と賃金の交換、すなわち社

会的関係の形態をとる。人間と人間の関係が物と物との関係として現れるとい

うこと。

商品が神秘的性格を持つ秘密は、人間自身の労働の社会的性格をあたかも生

産物が生まれながらにして持っている自然的性質であるかのように転倒的に反

映させるところに、ある。（マルクス主義経済学講座　上　p.44）

商品の物神性は、一定の社会関係（所有関係の分化と社会的分業という条件）

のもとで労働生産物が商品という形態をとることから発生する必然的な現象で

ある。

商品形態の神秘性は、単に次のことである。すなわち、商品形態は、人間にたいして、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に存在する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（ p.130）

労働の社会的性格：一人ひとりがいろいろな物をつくるのは私事である。し

かし、その品物が社会全体として必要とされる点では社会的性格をもつ。分業

のなかで物をつくり、それが全部より集まって社会を支えている。すなわち、

労働は社会的性格をもっている。

「生産物に現れている」：人々の社会的な関係が、その中に現れているとい

うこと。人間と人間の関係が、物と物との関係となって現れてくることがポイ

ントである。

この〝入れ替わり〟によって、労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物に、なる。（p.131）

例えば－物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的刺激とし

　　　　　ては現れないで、目の外部にある物の対象的形態として現れる。しかし、視覚

　　　　　の場合には、外敵対象である一つの物から、目というもう一つの物に、現実に

光が投げられる。物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係である。

　　これにたいして、労働生産物の商品形態およびこの形態をあらわす労働生産

　物の価値関係は、労働生産物の物理的性質およびそこから生じる物的諸関係と

は絶対になんのかかわりもない。

ここで人間にとって物と物との関係という幻影的形態をとるのは、人間そのものの一定の社会的関係にほかならない。（ p.131）

労働生産物の価値関係は（わかりやすく言えば値段）物そのものの中にある

性質（例、紅茶なら飲んでおいしい）ではなく、社会的な関係にある。

社会的関係とは人間と人間との関係のことである。例えば、紅茶をつくって

いる人と時計をつくっている人との関係が、物と物との関係として現れてくる。

「人と人との関係」が「物と物との関係」となって現れるのは、幻想的形態

である。

だから、類例を見いだすためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げ込まなければならない。

商品の神秘的性格は、ある一面では、宗教世界の神秘性と類似している。宗

教世界では人間の観念の産物が、それ自体の生命をもった自立的存在として立

ち現われ、それらの、相互の間でも、人間とのあいだにも関係を取り結んでい

る。宗教において、人間がつくった物でありながら、超人間的・神秘的な力を

もつものとして広く観念されている対象物を物神という。

商品の神秘的性格は、宗教上の物神と共通した一面をもっているという意味

で商品の物神性という。

商品世界のこの物神的性格は、これまでの分析がすでに示したように、商品を生産する労働に固有な社会的性格から生ずる。（p.131）

商品が神秘的性格を持つ秘密は、人間自身の労働の社会的性格をあたかも生

産物が生まれながらにして持っている自然的性質であるかのように、転倒的に

反映させるところにある。商品をつくっている労働の一つひとつは、私事で

ある。ところが、商品が市場にもちだされ、売られるようになると社会的な労

働になり、商品は社会的性格をもつようになる。

商品の物神性は、一定の物的な社会関係に根ざしており、その秘密を解明し

たとしても、商品生産が続く限りは、物神性そのものを取りのぞくことはでき

ない。商品に付着してる。物神性は商品を生産する労働に固有な社会的性格か

ら生ずるのである。

私的諸労働は、交換によって労働生産物が、そしてまた労働生産物を媒介として生産者たちが置かれる諸関係を通して、事実上はじめて、社会的総労働の諸分岐として自己を発見する。（p.131）

諸分岐：私的諸労働は、労働生産物を媒介として社会的労働の一部分とな

る。労働生産物を通しての社会的な関係になるから、人と人との直接的な関係

でなくて、物と物との社会的関係として現れてくる。

物物交換（直接交換）の場合は、人と人との関係は目に見える。

市場に持ち込むと誰が買ってくれるかわからない。人と人との直接的な関係

はない。

商品は自然形態、価値形態という二重形態をもつ限りにおいてのみ、商品と

いう形態をとる。

労働生産物は、それらの交換の内部ではじめて、それらの互に感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂は、（p.132）

「交換の内部で…」：労働生産物は、交換されて、その使い道とは別に、社

会的に同等な価値対象性、すなわち交換できる価値をもつものとして扱われる

ということ。

　　「有用物と価値物とへの…」：分裂は、有用物が交換めあてに生産されるようになったときにはじまる。

中世のギルドは、注文生産が主であり、洋服の場合は寸法に合わせてつくられ、職人と客は直接的な人間関係がある。ところが交換が広がると、直接的な人間関係は消え、交換目当てに生産が行われ、売るためにつくることになNる。

この瞬間から、生産者たちの私的労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。私的諸労働は、一面では、一定の有用的労働として一定の社会的欲求を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の諸分岐（p.132）

「この瞬間」：労働生産物が有用物と価値物へと分裂した瞬間から。

私的労働の二重の社会的性格

❶他人の欲望（社会的欲望）をみたさなければならぬという社会的性格。

❷どの労働も人間労働としては等しいという社会的性格。

マルクスは、❷を「私的労働の社会的性格」と呼んでいる。

「二重の…」：一面では、一定の有用的労働として、一定の社会的欲求を満

たさなければならない。そうすることで、社会的分業の一部を担っている。

もう一面では、他の物と交換される。つまり、物を売ってそのお金で別の物

を買うという生産者たちの要求も満たされる。すなわち、二重の社会的性格を

受けとるのである。

　　物と物との交換は、抽象的な人間労働を基準に行われる。そのことで二重の

社会的性格が起こる。私的労働は社会的に有用でなければならない。社会に役

立たないものをつくっても誰も買わないし、社会的分業の一部にもならないの

である。

したがって、人間が彼らの労働生産物を価値として互いに関連させるのは、これらの物が彼らにとって一様な人間的労働の単なる物的外皮として通用するからではない。

…価値のにはそれがなんであるか書かれているわけではない。(p.133)

「これは私の労働の塊りです。だから買ってください」とはじまるのではな

く、それが交換されることにより、その中に含まれている人間労働が等しいの

だとわかってくる。つまり、人間労働がこもっているのだから、それが交換さ

れれなければ、人間労働がこもっていることはからない。

むしろ、価値が、どの労働生産物をも一種の社会的象形文字に転化するのである。あとになって人間は、この象形文字の意味を解読して彼ら自身の社会的生産物―というのは、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的産物だからであるーの秘密の真相を知ろうとする。労働生産物は、それが価値である限り、その生産に支出された人間的労働の単なる物的表現にすぎないという後代の科学的発見は、（p.133）

…商品生産というこの特殊的生産形態だけにあてはまること、すなわち、互いに独立した私的労働の独特な社会的性格は、人間的労働としてのそれらの同等性にあり、かつ、この社会的性格が労働生産物の価値性格という形態をとるのだ

「象形文字」：絵文字と文字の中間ぐらいの字という意味で使われている。

人間は、あとのなってこの象形文字の意味を理解する。

「あとになって」：後になって人間は自分たちがつくったものが、なぜ交換

されるのかを知ろうとするのだ。

　 「払いのけはしない」：労働生産物は人間労働の塊りである。この発見は、後

代の科学的発見です。つまり労働価値説である。労働の社会的性格とは、世の

中の必要なものを支え、それが交換されるということ。それが商品というかた

ちをとって現れる。それがなぜかという秘密が解明されても、しかし、商品というかたちで現れることは依然として同じだ。これを「対象的外観を払いのけはしない」と言っている。

生産物の交換者たちがさしあたり実際に関心をもつのは、自分の生産物と引き換えにどれだけの他人の生産物が手にはいるか、

…この割合が一定の慣習的な固定制にまで成熟すると、この割合はあたかも労働生産物の本性から生じるかのように見える。（p.134）

彼らは、この運動をするのではなく、この運動によって制御される。

…それらの生産のために社会的に必要な労働時間が―たとえば誰かの頭の上に家が崩れ落ちるときの重量の法則のように―規制的な自然法則として弾力的に自己を貫徹するからである、（p.134）

「関心をもつのは…」：マーケットへ持って行き、いくらで売れるかが一番

の関心ごと。

1缶の紅茶110円であるが、それは紅茶が商品となり、他の物と交換される

ものとなったとき、価値をもつ。その価値は、社会的関係を表すものであり、その大きさはその商品を生産するための社会的平均的な労働時間の大きさで決まる。しかも、その貨幣表現である値段は、さらに価値を中心に需給関係でたえず変動する。したがって、1缶のよって、よって紅茶は常に110円とは限らない。

　　　　　　値段の変動は、生産者の方ではどうにもできない。むしろ、逆に値段の上り下がりによって自分が物のつくり方を変えなければならない。

値段によって生産者の方が、コントロール（制御）されてしまう。「互いに

独立に」そういう仕方をしているが、その交換比率はいつも偶然に動いている。

「規制的な自然法則として」：物の値段、交換比率は生産者の方ではどうに

もならない。生産者の方がそれに合わせなければならない。この物をつくるに

は、もっと長い時間がかかったと言っても許してくれない。社会的に必要な労

働時間によってしばられる。それに合わせなければならない。こうしたことが

起きるためには、完全に発展した商品生産が必要である。商品生産が発展する

ことによって、価値あるいは価格の方が逆に生産者を縛るようになってくると

いうこと。

　人間の生活の諸形態についての省察は、したがってそれらの科学的分析もまた、一般に、現実の発展とは反対の道をたどる。

…これらの形態の歴史的性格についてではなくーこれらの形態は人々にはむしろすでに不変のものと考えられている。

…諸商品の価値性格の確定に導いたのは、諸商品の共通な貨幣表現にほかならなかった。ところが、商品世界のまさにこの完成形態―貨幣形態―こそは、私的諸労働の社会的生活を、あらわに示さず、かえって、物的におおい隠すのである。（ｐ.135）

「現実の発展」：商品生産がひろがるということ。商品生産が広がってか

ら、その中で交換がどう行われているか科学者が後から分析することになる。

つまり、分析はあとから始まる。

　　　　　　労働生産物が商品になる。それには、商品流通ということが前提とされている。後から分析するときに、人々は、そういう商品生産の形態が、ある一定の歴史段階で現れるものではなく、いつでもあるものとして、それを前提として分析が始まる。商品生産ではない世の中があるとは考えなかった。そして、その商品生産の社会で、商品生産の中心にあるのはお金ですが、そういうものが人間と人間のとの関係をおおい隠してしまうのです。

それらは、商品生産というこの歴史的に規定された社会的生産様式の生産関係にたいする、社会的に妥当な、したがって客観的な思考形態なのである。（p.136）

貨幣というものの中で、人間と人間の関係が隠されてしまうのだと言ってい

る。こうした貨幣形態を分析したのはブルジョア経済学である。お金によって

物の値打ちがはかれるという世の中をみんなが当たり前と考えるのカテゴリー

である。貨幣の物神性、神秘性を明らかにするために商品生産以外の世界をの

ぞいてみる。

（貨幣の物神性）

商品世界の物神性は、貨幣においていっそう目をくらます形で現れる。

　　　　　　貨幣は一般的等価の地位を独占することになった特殊な商品である。貨幣の

持っている特殊な性質、すなわち、その現物形態がそのまま他の商品の価値の

現象形態となり、その重量によって商品価値を価格として表示するという性格

は、社会的に与えられたものである。決して貨幣商品が、すなわち金が自然的

な性質としてもっているのではない。

ところが、金が貨幣としての地位が固定化されてくると、金を貨幣にした社

会関係が見失われて、金は地の底から出てきたままで、貨幣としての特殊な性

格・力をもっているかのように見えてくる。つまり、重いとか、光っていると

かいう金の自然的性質と、一般等価物物として機能するという社会的性質とが

無区別の物として取り扱われるにいたる。

　　　　　　商品経済のもとで金が崇拝されるのは、実は社会によって一般等価物の地位

におかれたからであるにもかかわらず、あたかも黄金色に輝く金属であるから

とみなされる。貨幣の物神性である。

　経済学はロビンソン物語を好むから、まず孤島のロビンソンに登場ねがおう。（p.137）

貨幣により、人間と人間の関係がおおいい隠される。この貨幣形態を分析し

たのが、ブルジョア経済学である。マルクスは、商品あるいは貨幣の物神性、

神秘性を明らかにするために、商品生産が行われていない社会を考えた。

ロビンソン・クルーソー物語－船が難破し、１人、ロビンソンが孤島に漂着

する。日記をつけ、家計簿（お金ではなく、労働時間）をつけ、合理的に生活

をした。ロビンソ・クルーソーは自給自足。種々の生産物を生産する。そのた

めの自分の時間を種々の機能のあいだに正確に配分する。配分の基準は生産物

1単位当たりに必要な労働時間である。この時の生産物は商品ではない。この

労働時間は生産物の価値という形態をとらない。少しの神秘性もない。

ロビンソン・クルーソーの社会や中世のような交換価値で商品を交換しない

　　　　　社会には、商品や貨幣の物神的性格はなく、市場を通して商品が交換される資

　　　　　本主義になって初めて、物神的性格が現れてきたのであり、その意味で資本主

義は人類普遍の社会ではなく、特殊的私的な社会だと言っている。

暗いヨーロッパの中世に目を移そう。(p .138 )

…農奴と領主と、臣下と君主と、俗人と聖職者。人格的依存が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に立つ生活領域をも性格づけている。

…社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物もそれらの現実性とは異なる幻想的姿態をとる必要はない。

…僧侶たちに納めるべき10分の1税は、僧侶の祝福よりもはっきりしている。

領主と農奴の関係は、生産物の一定割合を納めなければ処罰される。力関係

で決まっていた。教会に1/10税を納めなければならないが、それは自分のため

にどれだけお祈りしてくれるかどうかに関係なかった。隷属関係は人と人との

関係で、物と物との関係ではない。

…これらの生産物を生み出すさまざまな労働、農耕労働、牧畜労働、紡績労働、織布労働、裁縫労働などは、(p.139 )

家父長的な共同体＝氏族社会。氏族の長が構成員に仕事の役割分担を決めて

いる。労働の生産物を氏族の長に納める。構成員は生産物を売ることはできま

せん。

共同的生活手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自発的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体(p.140 )

…この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。

…彼の労働時間によって規定される物と前提しょう。そうすると、労働時間は二重の役割を果たすことになるだろう。

…人々が彼らの労働および労働生産物にたいしてもつ社会的諸関連は、ここでは、生産においても分配においても、簡単明瞭である。(p.141

マルクスが考えた社会主義－「共同的生活手段で労働し、自分たちの多くの

個人的労働力を自発的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合

体」

マルクスは、社会主義の青写真をあまり書いていない。「自由な人々の連合

体」とは、個人ではなく社会全体で労働の割り振りを考える。

生産手段の私有制がなくなり、社会的所有となる。

「労働時間の二重の役割」：①その社会にとって必要な物をどれだけ作るの

かという目安となる。②生産物を個々の生産者に配分するための分配の目安

となる。

この物的形態において彼らの私的諸労働を同等な人間労働として互いに関連させることがあるが、このような商品生産者たちの社会にとっては、抽象的人間を礼拝するキリスト教、ことにそのブルジョア的発展であるプロテスタント、理神的などとしてのキリスト教がもっともふさわしい宗教形態である。古アジア的、古代的等々の生産様式においては、生産物の商品への転化、したがってまた商品生産者としての人間の定住は、一つの副次的な役割を、―といっても、共同体が崩壊段階にはいっていけばいくほど、ますます重要な役割を―演じている。(p.141)

カソリック－飾り立てて物を拝む傾向がある。十字架やイエス像など。

　　　　　　プロテスタント－自分の心の中にある神を思い浮かべて拝む。

　　　　　 　「心の中の神」という抽象性をもつようになるのは、ブルジョア社会。商

品生産の社会に一番ふさわしいのは、身分の違いを超えて人間がすべて平等

に考えられているような社会ということのによる。

自然的な類的関係のからまだ切り離されて個々人の未成熟にもとづいているか、さもなければ、直接的な支配・隷属関係にもとづいている。(p.142)

…この現実の狭隘さが古代の自然宗教や民族宗教に観念的に反映している。

「自然的な類的連関の臍帯から…」：人々が個人として自立していない人間

関係の上に物の生産、あるいは分業が成り立っている。横溢さが民族宗教や自

然宗教に反映している。すなわち、キリスト教は世界宗教でどの民族も加わる

ことができる。古代宗教の代表はユダヤ教。ユダヤ教はユダヤ民族は神によっ

て選ばれた特別の民族という教えであり、割礼の儀式がある。

儀式に参加したものだけがこの宗教に参加する。

　　　　　 イスラム教にも同じような考えがある。「片手にコーラン、片手に剣」民族的な狭さを支えているのが古代の宗教だとマルクスは言っている。

けれども、そのためには、社会の物質的基礎が、あるいは、それ自身がまた長く、苦難に満ちた発展しの自然発生的産物である一連の物資的存在条件が、必要とされる。(p.142)

「現実的世界の宗教的反射」：商品生産が発展してくる（現実）のもとで

は、誰彼の差別たれ」となると現実を反射することになると言っている。

　　　　　　商品生産社会が意識的計画的管理下に置かれるとときには、商品の神秘性はなくなる。

マルクスは狭い民族的な宗教から、キリスト教的な非常に抽象的な人類一般

の世界宗教になって－それが商品生産社会にふさわしい－さらに、意識的計画

的管理のもとに置かれると、商品の物神性、神秘性もなくなるから宗教もなく

なると言いたかった。

「長い苦難に満ちた…」：社会主義、共産主義社会が実現されるためには、社会の生産力の発展が必要だと言っている。

ところで、確かに経済学は、不完全にではあるけれども、価値と価値の大きさを分析して、この形態のうちに隠されている内容を発見した。しかし、経済学は、では、なぜこの内容があの形態をとるのか、したがって、なぜ労働が価値に、またその継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに表わされるのか？という問題を提起したことさえなかった。生産過程が人間を支配していて、人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体に属しているということが、その額に書かれている諸定式は、経済学のブルジョア的意識にとっては、生産的労働そのものがそうであるのと同じくらい自明な自然的必然性である。(p.143)

古典派経済学－アダムスミスやリカードヴは価値をつくり出すのは労働だと

いうところまでは発見した。これは労働価値説。だが、「この内容」「あの内容」

はわからなかった。

この内容－労働の価値である。

あの内容－商品交換というかたち。

さらに、貨幣が生まれてくるのか、もわからなかった。

価値形態論がなかった－なぜ、労働が価値に、またその継続時間による労働の測定が労働生産物の価値の大きさに現れるのかが、わからなかった。

「認定式」：「人間がまだ生産過程を支配していない社会構成体」とは資本主

義のことである。資本主義では、物の値段の決まり方にしても、生産の分配にしても個人を超えた自然法則的なものによって決まる。人間は、こうした生産

過程をコントロールできず、逆に生産過程によって人間がコントロールされて

いる。経済の法則（恐慌による失業、値崩れで売れず破産）によって人間が支

配されている。

「自明な自然的必然性」：資本主義社会で生活しているものにとっては、資

本主義以外は考えられない。自然的必然性とは、みんな思い込んでいるという

こと。資本主義は変わりようがないとブルジョア経済学は考えている。

それだから、経済学が社会的生産有機体の前ブルジョア的形態を取り扱うやり方は、教父たちが前キリスト教的諸宗教を取り扱うやり方と同じなのである。（p.143）

今までの宗教は完全に間違っている。自分たちが正しくて、これ以上正しい

宗教は出てないと考えているのと同じである。ブルジョア経済学者も同じで自

分たちは永久不変と考えているのである。

　とりわけ、交換価値の形成における自然の役割についての退屈でばかばかしい論争が示している。（p.148）

物の価値を考えるとき、その物の中に入っている材料、自然の素材、つまり材料費は当然入っている。

生産の3要素－土地、資本、労働－土地は自然のことであるが、土地が生産

の上では一定の役割を果たすことになっている。これは、使用価値からみれば

その通り。交換価値からみれば、それは労働がつくり出すものだから自然素材

を含むことはありえない。

海で魚をとる。釣る場合、労働が投下されるので交換価値は生ずるが、海に

いる魚自体は自然があたえたものだから、交換価値の中には入ってこないということ。

重金主義：金や銀そのものが富である。アダムスミスは労働生産物が富と

いった。マルクスは拝金主義と冷笑した。

重農主義：地代は土地から生ずる。社会から生ずるのではないという考え

方。ケネーは土地が地代を生むのは自然の恵みと考えた。

土地＝自然の恵みである。土地には労働を投下してつくり出す以上の物を

付け加える力がある。この考え方でいくと農業以外は剰余価値を生まないこ

とになる。農業以外は、原料に労働を加えて、その値段で物を売ると儲けは

出てこないことになる。批判したのはアダムスミスである。アダムスミスは

マルクスは、交換価値を考える場合、自然のお恵みはないのだ。交換価値は

労働によって規定されるのであり、地代そのものは社会的関係の中で生じる

としている。

地代は『資本論』の最後の方で「地代は土地の私有があるから生じる」と

言っている。

諸商品がものを言えるとすれば、こう言うであろう。われわれの使用価値を人間の関心を引くかもしれない。（p.149）

…これまでまだどの化学者も、真珠やダイヤモンドのなかに交換価値を発見していない。

…物の使用価値は人間にとって交換なしに、したがって物と人間の直接的関係において実現される。

どれだけ使用価値があるかということは人間がこれをどうするかということ。

酒好きには酒は使用価値があるが、嫌いな人には全く使用価値はない。使用

価値はその中にあるのではなく、人間が必要としているかどうかで決まる.

使用価値は物として商品に属しているわけではない。属しているのは価値で

　　　　　ある。

「われわれ」：商品が言っている。価値というものは労働の塊りだ。それは「われわれ」に属している。しかし、交換という社会的な関係の中ですか、現

れてこないと言っている。

「経済学者が…どう伝えるか、…」：化学者は、成分を研究するが、売って

儲けようとは考えない。だから交換価値を発見していない。経済学者はそうい

うものの中に価値を発見する。すなわち、「物の使用価値は人間にとって交換

なしに、したがって物と人間の直接的関係において実現されるが、反対の物の

価値はただの交換においてのみ、したがって一つの社会的過程においてのみ、

実現される」のである。

　　(ryo)